論文（*Article*）

ゲーテとショーペンハウアーにみる〈自然〉の哲学的考察

Goethe and Schopenhauer – Philosophical Reflections on "Nature"

堀　郁
Iku Hori

For today's environmental ethics it is essential to overcome the Cartesian mechanical view, because it's the cause of many actual environmental problems. Therefore a new idea of *nature* is in need, which is meant to indicate, how humans and nature can coexist in harmony. A view of *nature* in its wholeness (*Natur als Ganzes*) is contradictory to the Cartesian mechanical perspective. But this view is the key to solve those environmental problems. J. W. v. Goethe and Arthur Schopenhauer are representatives of this view. This article examines the problems of thinking *nature* in its entirety by a philosophical comparison and interpretation of Goethe's and Schopenhauer's thoughts on *nature*.

キーワード：哲学、自然、環境思想、ゲーテ、ショーペンハウアー

Key Words ：Philosophy, Nature, Environmental Philosophy, Goethe, Schopenhauer

はじめに

本稿では、自然哲学ならびに環境思想における全体的自然の一考察として、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832）と、アルトゥール・ショーペンハウアー（1788-1860）の自然思想を取り上げる。両者を比較分析することによって、全体的自然観の現代的意義を考察し、さらにゲーテの自然思想に対するショーペンハウアーの役割についても新たな評価を試みる[1]。

1．〈自然〉を問うということ

現代社会において、「人と自然」の関係を問うことが重要であることは疑いない。しかし、〈自然〉とは何かと改めて問われると、私たちは当惑する

1　本稿におけるゲーテ、ショーペンハウアーの引用は以下のものを利用。Goethe: *Goethes Werke*. Hamburger Ausgabe. Bd. 1-14, Textkritisch durchgesehen und mit Anmerkungen versehen fon E. Trunz, Hamburg 1966. (=HA)、（なお、Maximen und Reflexionen. (In: HA12, S. 365-547)からの引用は略号（M&R）の後にHecker版の番号を記載）; Goethe: Die Schriften zur Naturwissenschaft. Leopoldina Ausgabe, Hrsg. im Auftrage der deutschen Akademie der Naturforscher (Leopoldina) , 1. Abt. Texte. 2. Abt. Erläuterungen. Weimar 1947-2011. (=LA); Goethe: Goethes Briefe. Hamburger Ausgabe. Bd. 1-4, Textkritisch durchgesehen und mit Anmerkungen versehen von K. R. Mandelkow, Hamburg 1962-1967. (=HA Br) Schopenhauer: *Sämtliche Werke*. Bd. 1-7, Hrsg. von A. Hübscher, F. A. Brockhaus, Mannheim, 1988; Schopenhauer: *Der Handschriftliche Nachlaß*. Bd. 1-5, Hrsg. von A. Hübscher, Waldemar Kramer, Frankfurt a. M. 1966-1975. (=HN)

ことになる。「自然とふれあう」、「自然と文明」、「自然を破壊する」、「自然を守る」、「自然の驚異」、「自然に還る」、「人と自然の共生」等々、私たちは日々〈自然〉という言葉を見聞きする。けれども、それは科学の実験・観察の対象としての〈自然〉なのか、文化や文明の対立概念としての〈自然〉なのか、人間と対立関係にあるものなのか、それとも、人間も内包している自然なのか。このように私たちは自然の多様な意味をふだんから意識していようと、無意識であろうと使い分けていることが明らかになる。広辞苑の自然の項には次のように書かれている。

【自然】①(ジネンとも)おのずからそうなっているさま。天然のままで人為の加わらぬさま。②㋑(nature)人工・人為になったものの文化に対し、人力によって変更・形成・規制されることなく、おのずからなる生成・展開によって成りいでた状態。㋺おのずからなる生成・展開を惹起させる本具の力としての、ものの性。本性。本質。㋩人間を含めて天地間の万物。宇宙。㋥精神に対し、外的経験の対象の総体。すなわち、物体界とその諸現象。㋭歴史に対し、普遍性・反復性・法則性・必然性の立場からみた世界。㋬自由・当為に対し因果的必然の世界。③人の力では予測できないこと。[2]

ここではまず、〈自然〉が〈人為〉と対立するものであるのと同時に、人間をも内包するものであるという二重性が強調されている。ところが、現代においてはこの〈自然〉と〈人為〉の対立がもはや変化している。手つかずのものが自然であり、人の手が加わっているものはすべて人工物であり、自然ではないと、現代社会で言うことができるだろうか。例えば、レジャーやアウトドアスポーツで、「自然とふれあう」と言う時、その自然ははたして本当に人為から切り離されているのだろうか。温室栽培の野菜や植物が人工的なものであり、人の手の加わっている里山は、原生林と区別して自然ではない人工物とみなしているのであろうか[3]。生殖技術によって誕生した生命は人工であるとして、私たちは他の自然妊娠によって誕生した生命と区別するだろうか。このように考えてみると、私たちを取り囲む世界において、人為の加わらぬ、手つかずの自然というものは存在せず、完全に人為の加わらぬ自然が果たして存在するのかという疑問すら浮かんでくる。自然と人工・人為の境界はむしろ曖昧であり、ちょうど日本庭園における借景のように、――庭園の背景の自然と人為の加わった庭が、あたかも一枚の絵のような世界をつくり上げるかのように――私たちの世界は多くは自然と人工・人為の双方が融合しあっているのではないだろうか[4]。

さらに、この「自然とは何か」という問いは、哲学的にみて、もう一つ別の問いが隠されている。それは、〈人間〉に対する問いである。なぜなら、この「自然とは何か」という問いは、自然そのものを解き明かすことだけではなく、人間が自然の中でいかに自らを位置付けるか、あるいは、自然に対して自分をどのように関係づけるかという意図も含まれているからである。「自然とはなにか」という問いは、次のように言い換えることもできる。

2　新村出(編)『広辞苑』(第三版)、岩波書店、1989年、1055頁。

3　里山と原生林の関係にみる、日本的自然観の人為と自然の区別の曖昧さについては、拙論「私たちは自然と共生できるのか？―〈もののけ姫〉の哲学的考察」、『総合政策研究』、No. 28、2008年、99-108頁を参照。

4　G. ベーメは近代において、自然と文化、自然と文明という対立が取り払われ流動的になったことを指摘する。そのことによって「自然はもはや〈所与〉として甘受するべきものではなくなり、むしろ次第に〈作成可能なもの〉とみなされるようになった」と。こうして自然は見出されるものではなくて、自然法則に則って人工的に作られたものでも〈自然〉と呼ばれうるようになる。ゲルノート・ベーメ「ゲーテと近代文明」、久山雄甫(訳)、『モルフォロギア。ゲーテと自然科学』、第34号、2012年、19-32頁。ここでは20、24-25頁を参照。Siehe auch Böhme, Gernot: Goethes Faust als philosophischer Text. Kunsterdingen 2005, S. 104-127.

「いかに人間は自然を理解することができるのか」、と。これは自然を自らの思考体形に取り込もうとする、自然に対する人間の意志と理解することもできるだろう。いかなる共同体、いかなる文化においても、人間と自然が互いにどのような関係にあるかという説明、規範が必要とされる。この規範を「自然観」と呼ぶ。言い換えれば、人間存在を想定することなしに、私たちは自然を説明することは不可能である。両者の関係がどのようなものであれ――人間が自然を支配する自然観であれ、人間が自然に従属する自然観であれ――、〈自然〉の問題領域から、観察者であり、問いを立てる者である〈人間〉を完全に切り離してとらえることはできない。手つかずの自然はもはや実際には存在せず、人為と自然の融合した世界になっているように、〈自然〉の問いもまた〈人間〉と関係づけてのみ理解することができる。それゆえに、自然を解明しようとするすべての試みは同時に人間学的でもある。

「近代は人間が自然から切り離されることによって始まる[5]」という哲学者の言葉が端的に表しているように、近代は人間と自然の関係の劇的な転換期とみなすことができる。自然の問いは、自然と人間の関係を問うことであると先に述べたが、一七世紀にデカルト(1596 – 1650)が物質(res extensa)を精神(res cogitans)から切り離したのをはじめとして、人間と自然の関係を、主観と客観としてとらえる二元論的構造は、その後に続く一八世紀の自然科学の自然哲学からの独立と発展、加えて、技術の発達と産業革命とともに定着し現代にいたるまで絶大な影響力をもつようになる。近代自然科学が取り扱う自然とは、計量可能なもの、法則や定理で表現され、再現されうるものである。ゆえに近代的自然観は機械論的自然観である。機械論的自然観は、近代に限らず、たとえば古代においてデモクリトスの原子論的自然哲学などに認めることができる。しかし、圧倒的な影響力の大きさと、数多くの深刻な環境問題の原因となっているうえで、近代機械論的自然観は、他の機械論的自然観とは一線を画している。

そして、ヨーロッパ思想史における自然の根源的な意味に立ち返ってみると、そこに機械論的自然観とは異なる、もう一つの自然の姿を見いだすことができる。“*Das Historische Wörterbuch der Philosophie*“ の〈自然〉の古代の項目には、次のように記されている。「１．性質・本質」、「２．生成・発育・生長」[6]。これは人間と自然の二元論に依拠するデカルト的自然観では描くことのできない、全く別の自然像である。ここで説明されている〈自然〉(＝*Physis*)とは、自然科学の対象になるような自然現象だけを指したものではない。むしろ、〈自然〉を「本質」(＝不変なもの)と「生成」(＝変化するもの)としてとらえることによって、ダイナミックな〈世界〉の在り方として読み解かれねばならないものであることを示唆している。

近代批判として、そして、現代の環境問題の解決を目指すうえで、近代的自然観の批判は繰り返しおこなわれてきた。自然を主観と客観、精神と物体の二元論的構造において理解するのではなく、それとは別の新しい自然の定義、新しい自然観が求めようとする試みである。このような試みに対し、〈自然〉(＝Physis)の語源は貴重な手掛かりとなる。Physisは、機械論的自然観とは対照的な、自然を人間も含め万物を内包するもの、万物を生成させかつ万物を結びつけるような、ダイナミックな営みとしての自然を示唆する。このような自然観は、有機的自然、生気論、全体論などが

5 Schelling, F. M. J.: *Philosophie der Kunst.* In: SW V. S. 427.
6 Ritter, J./ Gründer, K. (Hrsg.): *Historisches Wörterbuch der Philosophie. Bd. 6: Mo-O.* Darmstadt 1984, S. 421. [Artikel „Natur-I. *Antike*“ von Hager, F. P.]

あるが、これらをここでは総称して全体的自然観と呼ぶ[7]。この自然観の思想家として、18世紀の思想家を例にあげるならば、自然哲学時代のF. W. J. シェリング(1775 – 1854)、ゲーテ、またロマン主義者などがいる。けれども、全体的自然観が描く人間と自然の関係とは、具体的にはどのような関係になるのであろうか。人と自然の結びつき、合一を説く全体的自然観において、近代以降培われてきた〈個〉の概念はどのように扱われるのかという問題である。近代以降の〈個〉の概念の発達は、〈個〉の権利の問題、倫理の対象の拡大を促し、環境思想の発展へと繋がっていた[8]。だが、全体主義の如く、全体的自然観においても〈個〉は否定されてしまうのだろうか。あるいは、〈個〉は制限されてしまうのだろうか。全体的自然観における人と自然の関係を明らかにしなければ、近代的自然観に代わる新しい人間と自然の関係の構築という課題を担うことはできない。この問題を解く一つの手がかりとして、ゲーテとショーペンハウアーの自然思想をみていく。

２．全体的自然の問題――ゲーテ自然思想の場合

一七世紀のデカルトやF・ベーコン、そしてニュートンの登場、一八世紀における自然科学の哲学からの独立と発展。このようにして「自然とは何か」という問いは、それまで哲学が担っていた課題を、自然科学が引き受けるようになる。デカルト的二元論で説明される人間と自然の対立は、近代において確固たるものとなり、それ以降、生活ならびに思考様式に圧倒的な影響力をあたえるようになった。さらに技術の進歩も――技術は必ずしも自然科学と結びつけることはできないのだが――、これを後押しすることになった。この近代機械論的自然観は、人間と自然を主観と客観の関係に分けることによって、人間は自然に対してただ行為(消費)するために働きかけ、自然は人間の行為のための物質の提供という関係に読み換えられていく。それは人間が自然を行為(消費)によって、無制限かつ放縦に侵害干渉するという危険性をはらんでいた。

だがそれゆえに、近代において、人間と自然の関係を新たに構築することを、喫緊の課題とする動きもでてくる。ゲーテもその一人である。近代自然科学とは対照的に、人と自然の相互作用を認め、「生き生きと生成するものをそのようなものとして認識し、眼にみえ把握できる外的部分を関連付けて理解し、それらを内部の暗示として受け入れ、そして全体を直観においてある程度まで掌握しようとする」(HA13, 55)欲求をゲーテは抱いていた。

ゲーテの自然研究と自然思想の根底には彼の近代批判がある。彼が遺した膨大な自然研究に関する文献は色彩論、形態学、解剖学、鉱物学、地質学と様々な領域にわたる。これらの資料は彼の多彩な才能の一面を伺い知るだけはなく、彼の近代社会批判と世界観を理解する上で外すことのできないものである。

まるでファウストのように、ゲーテは自然研究において、「世界を最も奥深くで総べるもの」(HA3, 20)、「全体の根底にある理念」(HA13, 31)を理解しようとし、さらに、世界の「存在と生成の多様性、また生き生きと織りなす関係の多様性」(HA13, 53)を追究することを目指す。それは「測定不可能な世界を、できる限り測定可能かつ計量可能な世界で理解しようとする」(M&R 1286)ニュートン的自然科学を批判するものであった。ゲーテは一方では当時の自然科学と最新技術を熱心に学び吸収しながらも、他方では、自

7　機械論に対する全体的自然観の歴史的意義と、20世紀の全体論(Holism)については以下を参照。K. M. メイヤー・アビッヒ「２０世紀のホーリズム」、『われわれは〈自然〉をどう考えてきたか』、G. ベーメ(編)、伊坂青司/長島隆(監訳)、どうぶつ社、1998年、401-411頁。
8　参照、ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利。環境倫理の文明史』、岡崎洋(監修)、松野弘(訳)、TBSブリタニカ、1993年、27-67頁。

然を「数学の助力なしに観察し、研究し、理解する」(LA11, 273)ことにこだわっていた。それは彼が自然を「生命あるものは確かに構成分子に分けることはできる。しかし、分解されたものを再び組み立て生命をふきこむことは不可能である」(HA13 55)と、近代的自然科学の分析的手法ではとらえることのできないもの、生けるものとして、主観と客観が融合しあう状態、「観察者の個性と絡みあい、縺れあっている」(M&R1224)状態からとらえていたからである。ゲーテの自然研究は、当時の自然科学者からは評価をうけることはほとんどなかったが、ロマン主義者や自然哲学者に影響を与えている[9]。さらに、二十世紀に入ってからは、ハイゼンベルク、ヴァイツゼッカーをはじめとする自然科学者から再評価され、環境保護思想においても注目されるようになった。

全体的自然観の思想として、ゲーテの魅力とは、人間と自然の結びつき、主観と客観の合一を謳いながらも、決して〈個〉を否定せず、全体性の中に埋没させないところにある。ゲーテは自然研究の方法として次のように言う。

> 自然と同時に自分自身を探究し、自然にも精神にも暴力をふるうことなく、両者を穏やかな相互作用によって互いに調和のとれた状態にすることは、好ましい作業である。(M&R1140)

人と自然が相互に作用しあう関係、主観と客観の融合。環境思想においてみられる近代的自然観の批判が、人間中心主義から自然中心主義への移行となる場合、それらは得てして、近代的自然観の鏡像であり二元論的構造にとどまっているのに対して、ゲーテの自然研究は、まるで人間と自然の紐帯のようにバランスをとりながら、二元論的構造を離れて両者を結び付けようとする。

> 主観の中にあるものはすべて客観の中にあり、
> しかもそれ以上のものである。
> 客観の中にあるものはすべて主観の中にあり、
> しかもそれ以上のものである。
> 私たちは二重の意味で見放され、見守られている。
> 客観にそれ以上のものを認めるならば、
> わたしたちは主観に固執している。
> (M&R 515)

ゲーテによれば、主観と客観は結びついており、互いに引き離すことができないものである。いわば両者は連続性の中に在る。それゆえに、人間が自然を観察する際には、ある種の慎重さ、「あらゆる尊大さを断念(＝Entäußerung)すること」(HA11 134)が要求されると、ゲーテは指摘する。これが〈個〉を自然に必要以上に介入せず、かつ全体的自然の中で個を失わず保つための、主観と客観の調和をとる鍵となる。ただし、この〈断念〉は「すべての事物をあるがままに見て理解する訓練」(HA11 134)とされていることからも明らかなように、近代的自然観に代わる新たな自然観の確立を目指したものというよりも、まず彼と志を一にする者、全体的自然観の立場から自然を把握しようとする者たちにむけられた、いわば万人に開かれたものではない。さらに、ゲーテのプラトン的イデーの受容であり、彼の自然思想の要となる原理、〈原現象〉(Urphänomen)の最終的な扱いにおいても、同様の問題がみとめられる。この問題は次章で扱う。

環境問題、経済至上主義、功利主義、成果主義が総べる現代社会批判として、ゲーテ自然思想は

9 ゲーテの自然思想は当時のロマン主義者に受け入れられたが、ゲーテ自身は「古典的なものは健全であり、ロマン主義的なものは病的である」(M&R1031)と、ロマン主義者に懐疑的な態度をとり、距離を置いている。Siehe Engelhardt, W. v./ Kuhn, D.: *Johann Wolfgang Goethe. In: Klassiker der Naturphilosophie: Von den Vorsokratikern bis zur Kopenhagener Schule.* (Hrsg.) Böhme, G., München 1989, S. 220.

示唆に富みながらも、今日の環境問題の具体的な対策となる全体的自然観の思想を提供するまでにはいたっていない。これは現代社会の近代論的自然観の盤石さに起因するのだけではなく、ゲーテ思想の問題点にもある。

これらの問題点を、哲学的に批判したのがショーペンハウアーである。ゲーテと思想的交流のあった哲学者の中で、ショーペンハウアーの場合は、他の哲学者に比べると、いままであまり注目されてはこなかった[10]。しかし、彼こそが、ゲーテの全体的自然観を批判しつつ受容したという点で、ゲーテ自然思想と全体的自然観の現代における意義を考える上で重要な役割を果たしている。

3．ゲーテとショーペンハウアーの邂逅：全体的自然観の思想

ショーペンハウアーとゲーテの思想に立ち入る前に、両者の関係についてみてみたい。ゲーテはショーペンハウアーの思想と人生に大きな影響を与えた人物の一人である。家族構成や家庭的背景の奇妙な相似もあり、ショーペンハウアーが約四十歳年の離れたゲーテに親近感を抱いていたことは想像に難くない。二人の父、ヨハン・カスパー・ゲーテとハインリヒ・フローリス・ショーペンハウアーは裕福であり、共に38歳で才気煥発な若い女性と結婚している。しかし、どちらの場合も、妻からの愛を期待することも、また得ることも能わなかった結婚であり、それぞれ天才の息子を一人、さらに娘を一人授かっている[11]。若き哲学者の詩人に対する感情を、ヒプシャーは次のように述べている。「内的な親近性、出生と運命の相似に対する感情から、彼はすでに青年時代からゲーテに対して、隠された臆病さと時には内なる反抗心ももって尊敬すべき理想像を見ていたのだろう[12]」と。ゲーテはショーペンハウアーにとって理想の人物であった。もっと正確に言えば、華やかで社交的な母親の陰に隠れ、存在の薄かった父ハインリヒに代わる父親像――超克の対象であり、やがて自分を後継者として認め、祝福の言葉をおくる存在――として、ゲーテは彼の眼に映っていた。それゆえに、若きショーペンハウアーのゲーテとの思想交流は、彼にとって父親的存在から承認されるための試みでもあった。

ショーペンハウアーの個人的かつ哲学的なゲーテとの思想交流は、1813年から1814年にかけての数か月間、色彩論研究を介して集中的に展開している。この交流は短いものであったが、ショーペンハウアーの自然思想を理解する上で重要である。ゲーテはこのまだ当時無名の若き哲学者の博士論文を読み、大いなる関心をよせた。かつてのシェリングがそうだったように、ゲーテはショーペンハウアーが自分の自然研究の盟友になると信じたからである。ニュートン光学に対する懐疑から色彩論を展開したゲーテは、ショーペンハウアーが彼とともに、白色光がすべての色彩のスペクトルを含むというニュートン光学を批判し論駁することを期待していた。しかし、彼の期待は思想交流の末に、やがて失望に変わり、その結果、ショーペンハウアーから――かつて若き友人であるシェリングに対してしたのと同様に――去っていくことになった。

10　このテーマに関する最近の研究においては、M. キースナーが、ショーペンハウアーの知的直観をゲーテの自然研究との関連で論じているが、彼女はショーペンハウアーとゲーテの思想交流を、ショーペンハウアーのカント哲学受容を介していたからという消極的な解釈をしている。Kisner, M.: *In der Anschauung liegt die Wahrheit. Eine Analyse von Schopenhauers Intellektualität der Anschauung in ihrem Bezug zu Goethes Naturlehre,* In: *Schopenhauer und Goethe. Biographische und philosophische Perspektiven.* (Hrsg.) Schubbe, D., Fauth, S. R., Hamburg, 2016, S. 230-246.

11　参　照：Hübscher, A.: *Denker gegen den Strom. Schopenhauer. Gestern-Heute-Morgen.* Bonn 1973, S. 64f. Siehe auch, Safranski, R.: *Schopenhauer und Die wilden Jahre der Philosophie.* Frankfurt am Main, 2001, S. 266-286.

12　A. a. O. S. 65.

ショーペンハウアーの色彩論はゲーテのものとは関心が異なっていた。色彩を生理学、物理、化学、心理学、哲学、芸術などの多岐にわたる視点からとらえる総合的な学問の試みであるゲーテ色彩論とは対照的に、ショーペンハウアーは、『視覚と色彩』(1816)において、ゲーテが生理学的色彩、物理学的色彩、化学的色彩の三つの部門から論じた色彩論を、生理学的色彩からのみ論じていた。ここにショーペンハウアーがゲーテの色彩論を認識論の観点から、すなわち主観の立場から読み換えようとしていたことが推測される。もちろん、弟子(と、少なくともゲーテは思っていた)のこのような論文を、主観と客観の相互作用から成り立つ自然を信望するゲーテには、とうてい認めることができなかった。こうしてゲーテとショーペンハウアーの師弟関係は終わりをむかえる。

二人の色彩論の差異は、哲学的視点の差異に原因を帰すことができる。ゲーテは客観的世界に重点をおき、これに対して、ショーペンハウアーは認識する主観に重点をおいた、と[13]。ショーペンハウアーの認識する主観の問題はやがて『意志と表象としての世界』の構想へと発展していく。主観のショーペンハウアーと客観のゲーテ。二人の視点の違いは明確な対比をなしており、説得力があるように思われる。ショーペンハウアー自身も次のように語っている。

> このゲーテはひどい実存論者で、客観は認識する主観に表象される限りにおいてのみ、そのように存在するなどとは、まったく思いつこうとはしなかった。彼はかつてジュピターの眼で私をじっと見つめながらこう言った。光は君が見る限りでしかそこに存在しないというのかね。光が君を見なければ、君は存在していないだろう、と。[14]

しかし、これらはすべて両者の哲学的方向性の違い――もしくは、両者の思い込み違い――が原因なのだろうか。少なくとも、ショーペンハウアーに対しては疑問が残る。ショーペンハウアーの色彩論研究に関心を失ったゲーテに対し、ショーペンハウアーが彼に送った手紙には次のように書いてある。「あなたの色彩論をピラミッドに喩えるならば、私の理論はその頂点になります。[…]あなたは、エジプト人のように、頂点からではなく、底辺の基礎から築くのを始め、その頂点を残すすべてを築き上げました。[…]しかし、あなたはこのピラミッドに実際に頂を置くのを私に委ねたのです[15]」ここで彼は自分こそがゲーテの色彩論を完成させる者だと主張している。四十歳年上のゲーテに対し、師弟関係ではなく対等の研究者として語りかける、当時まだ無名の哲学者の言葉は、若さゆえの傲慢さの表れのようにも思われる。だが、これはショーペンハウアーの傲慢さだけではないことが、彼の研究をみると明らかになってくる。

1812年、学位論文を発表する前のショーペンハウアーは、自身が思い描く主観と客観について次のように述べている。

> 存在するということは、主観にとっての客観であること、もしくは、客観にとっての主観であることにすぎない。主観が客観をつくるのか、あるいはその逆なのか。そのどちらでもなく、主観と客観は一つである。これは知的直観によってのみ捉えられるものである。(HNI 26)

このことから、ショーペンハウアーがすでに

13 金森誠也「往復書簡にみるショーペンハウアーとゲーテ」、日本ショーペンハウアー協会編『ショーペンハウアー研究』第9号、2004年、152-167頁。
14 Schopenhauer, A.: *Gespräche.* (Hrsg.) Hübscher, A., Stuttgart 1971, S. 31.
15 Schopenhauer, A.: *„Der Briefwechsel Arthur Schopenhauer“* Bd. 1, (Hrsg.) Gebhardt, C., München, 1929, S. 197.

ゲーテと出会う前から主観と客観をその結合においてとらえていたことが明らかになる。この主観客観の関係性についての叙述は1813年の学位論文において、再び見出される。

〈主観にとっての客観〉であるということと、〈われわれの表象〉であるということは、同じ一つのものである。(VII 18)

ショーペンハウアーはゲーテと同様に主観と客観の結合から出発しているが、これに超越論的観念論の影響を認めることができる。ゲーテもショーペンハウアーも、主観と客観を連続性において把握し、世界をカントの〈物自体〉の概念を用いることなしに説明することを試みている。これはデカルト的な二元論が支配的な時代において、哲学的に一つの重要な課題であった。この共通の問題意識を介して、ゲーテとショーペンハウアーは互いに歩み寄り、ともに思想を展開させていく。ならばなぜ後に両者の断絶が生じたのだろうか。この理由を探るべく、次に「イデー」について注目する。

４．全体的自然におけるイデー

自然の多様性と統一を可能にする全体的自然の思想には、主観を客観と結びつける原理が根底になければならない。この原理は〈イデー〉(＝理念)と名付けられるべきものである。この原理はゲーテにおいては〈原現象〉(＝Urphänomen)、ショーペンハウアーにおいては、〈プラトン的イデー〉(＝Platonische Idee)というかたちで現われる。原現象はゲーテによって造語であるが、これは自然物の多様性に共通する一つの根拠を与えるものであり、この根拠によってすべてが互いに結びつくということから、デカルト的な二元論の解消も意味している。しかし、それゆえに、ゲーテは原現象そのものを実在するものとしてとらえようと試み、現象の背後にはそれ以上のものはないという、超越的なもの、物自体を否定する考えにたどりつく。

理念と呼ばれるものは常に現象にあらわれる。それゆえに、あらゆる現象の法則として私たちに対峙している。(M&R 1136)

原現象とは多様な結果が生じる原理と同一視するべきではなく、その中に多様性が 直観される根源的な現象とみなすべきものである。(HA Br 4, 231)

〈原現象〉の概念は、ゲーテの自然思想を理解する重要な鍵である。しかし、それは矛盾を抱えている。つまり、原現象は一方では、「観念的に構築された、そこから複雑な現象が導き出される現象」でありながら、他方では、「現実に存在する原型」としてとらえることができるものだからである。原現象はあらゆる自然存在の形成の原理であり、同時に認識の問題に関連付けられたものである。シラーはかつてゲーテの思想には理念と経験の統一が根底にあることを指摘したが(HA10 538-542)、ゲーテ自身はシラーの指摘を受けるまでイデーを知覚する可能性について認識論的に徹底して考えたことはなかった。この原現象の二義性は彼の思想の瑕疵となる。ショーペンハウアーはゲーテの根本現象を、「徹底的に、客観的な事実」(VI 192)とみなし、ゲーテの自然研究の最終目標が結局は「客観的出来事についての正確で完全な叙述」であると批判した。それゆえに、ショーペンハウアーは認識論的観点から主客の結合におけるイデーを自ら解こうと試みるのである。

〈われわれの表象〉と呼ばれるものはすべて〈主観にとっての客観〉のことであり、〈主観にとっての客観〉と言われるものはすべて〈われわれの表象〉のことである。意識から独立してお

り、それ自体で存在しているもの、他のものと関係なしにそれだけで存在しているもの、他のものと関係なしにそれだけで存在するもの[実体ないし物自体]などは、われわれにとっての客観とはなりえない。(VII 18)

「〈われわれの表象〉と呼ばれるものはすべて〈主観にとっての客観〉」である。このショーペンハウアーの見解は、やはりゲーテの対照的な立場をとっているように思われる。ならばその思想は、ゲーテ自然学とは正反対の方向性を示す鏡像の如き思想なのだろうか。それとも、全体的自然観にあらたな展望を切り開くことを望んだのだろうか。

イデーをショーペンハウアーは「プラトン的イデー」と呼ぶ。プラトン的イデーとは、主観が[直接的な客観(＝身体)の]仲介によらず、意のままに、時には表象の順序や連関をも入れ替えて再現したファンタスマであるが(VII 27)、しかし、すべてのファンタスマがプラトン的イデーになることはない。そのためには理性による普遍性の承認が必要となる。「プラトン的イデーはしたがって想像力と理性の共同作業である。」(HNI 130f.)かくして、ショーペンハウアーにおける全体的自然はゲーテとは異なった方法で描かれることになる。

ショーペンハウアーの〈プラトン的イデー〉による試みは、全体的自然観に新たな様相を切り開いたが、ゲーテはやがて彼から離れていく。その原因を探るうえで、私たちはゲーテの似たようなエピソードを思い出す。それはシェリングとの関係である。シェリングから距離をおいたことについて、ゲーテは次のように語っている。

もし、私が詩的な時間を望まないのならば、彼[＝シェリング]に時々会ったことでしょう。哲学は私のもとでは詩を破壊します。[…]私は決して純粋に思弁的な態度をとることができず、どの法則に対しても直観を求めなくてはならず、それ故に自然の中に逃げこむのです。(HA Br 2, 408f.)

「哲学は私のもとでは詩を破壊する」、この彼の言葉は私たちを困惑させる。ゲーテの自然研究には何人かの哲学者がキーパーソンとして登場する。例えば、プラトン、アリストテレス、スピノザ、ライプニッツ、ヘルダー、カント、シェリング、そしてショーペンハウアー。しかし、ゲーテの哲学に対する態度はつねに矛盾にみちている。一方では、「厳密に言えば、私には哲学に対するセンスがない」(LA I, 9, 90)といい、また別の箇所では、「哲学から私は自分自身を常に遠ざけていた」とも語っている。しかしその一方で、死の間際において、「批判哲学と観念論が、私に自分自身への注意を喚起してくれたことに感謝している」とも述べている。(HA Br 4, 450)　ショーペンハウアーがゲーテのことを、「まさしく詩人であり、哲学者ではない」(VI 193)と評したように、このゲーテの一見相反する発言を単に哲学者と詩人の違いに帰することができるものだろうか。それともまだ他に理由があるのだろうか。この問いに答えるために、彼らの自然観が手掛かりとなる。全体的自然は確かにゲーテとシェリング、またはショーペンハウアーを結び付ける緒となるが、しかし同時に、彼らが互いに離れていく躓きの石にもなるのである。

人間が到達しうる最高のものとは、驚くことである。

もし人間を原現象が驚かしたのならば、満足しなくてはならない。[16]

16　Eckermann, J. P.: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens.* (Hrsg.) Beutler, B. , München, 1999, S. 319.

ゲーテの自然研究の究極目標は原現象の知覚にある。しかし、ゲーテは彼の研究に限界をもうけ、そして最終的にはその限界を越えてさらに研究を極めることは望まなかった。原現象の知覚がはたして可能かどうか、そしてどのように可能かどうかという問いに対して、ゲーテは――この問いの答えをもともとは直観に求めてはいたとしても――未解決のままにする。かくして原現象、ならびに全体的自然のさらなる追究の可能性は閉ざされることになるのである。

> 原現象を直に認識することは、わたしたちをある種の不安に陥れる。私たちは己の不完全性を感じてしまうのだ。ただ経験という永遠の戯れによって生命をあたえられたときのみ、わたしたちを喜ばせてくるのである。(HA12, 367)

ゲーテは自然をもっと奥深くまで探究することに不安を抱いていたのだろうか。「世界を最深奥で統べているもの」(HA3, 20)を認識するためには、ファウスト的な契約が必要となるかもしれない不安を。彼の言葉を自然研究者の謙虚さとみなすことはできる。しかし、彼の沈黙によって自然概念の上にはベールがかけられることになる。また同じく、全体的自然に基づく主客の在り方を唱えたシェリングも、自然哲学に対する関心を変化させ、次に絶対者に焦点をあてていく。なぜなら、自然にその独立性を付与することは、哲学的にみると、自我の自律性が解消される、少なくともそれが疑われる危険性をはらんでいるからである。シェリングはそれを恐れた。しかし、そのような問題はゲーテにとっては議論にならなかったように思われる。少なくとも彼は、全体的自然と個々の個性は互いに調和的に存在することができると信じていたようである。ただし、それは自ら限界をしくことによって守られたのではあるが。

デカルト的な、近代的自然観に代わり、新たな人間と自然の関係を構築するためには、ゲーテの自然観は、シェリングの自然哲学の場合と同様に、最後の詰めがかけている。ゲーテがおそらく自分の自然思想の問題に気づいていたのではないかという推測もできる。例えば、ヤスパースは次のように指摘している。

「[ゲーテは]恐ろしいものを見て触れていた。しかしこの探究尽くしがたいものに近づけば近づくほど、彼の言葉はいっそう躊躇するようになり、最後には沈黙する[17]」と。

これに対して、ショーペンハウアーは、ゲーテが沈黙することによって保留された全体的自然の問題に立ち入ろうとする。

> だが、一度でも、完全に自然であろうとしてみるがよい。そのとき、[自然の本質について]思索することは恐怖を呼び覚ます。必要とあれば自らを、すなわち自らのために全自然を破壊することを決意しない限り、精神の平安を得ることはできないであろう。(HNI 27)

ショーペンハウアーもゲーテの全体的自然に対する不安を理解しており、また「自らを、すなわち自らのために全自然を破壊すること」の危険性にも気づいていた。すでに述べたように、ショーペンハウアーにおいて、認識する自我としての主観と全体的自然は同一である。主観と客観は一つであるという見解は、ゲーテの自然観と相似している。しかし、ショーペンハウアーは、認識する主観が世界を観察し認識することは、同時に人間が世界へ介入することであることを決して忘れることはなかった。すべての自然観は人間学的である。それはデカルト的機械論的自然観だけではなくて、

17 Jaspers, K.: *Unsere Zukunft und Goethe*. Zürich 1949, S. 23.

全体的自然観も同様である。全体的自然を読み解くためには、まず次の質問に答えなくてはならない。それは「どのようにして個は全体性において存在することができるのか」という、問いである。それゆえに、ショーペンハウアーはこの自然観を主観の立場から、すなわち知による全体的自然の再構築として、とらえ直すことによって、この自然観の新たな解釈を試みるのである。

結び

ショーペンハウアーは後に二人の色彩論研究をふりかえり、ゲーテは「客観的すぎ」、それゆえに、彼の「素晴らしい客観性」が色彩論の完成を阻むこととなったと、指摘する。(VI 192)そして残念そうに哲学者はこう付け加える、ゲーテは「最良の収穫物を私[＝ショーペンハウアー]に刈り残しておかなくてはならなかった」(VI 193)、と。

ショーペンハウアーとゲーテの思想的の不一致は、二人の異なった思想の方向性の結果として説明することができる。ショーペンハウアーは、いかにして主観が世界を認識することができるかということに関心を置き、一方ゲーテの思想は客観的なものに向かったと。しかし、もし二人の共通の〈全体的自然〉を考慮すれば、ショーペンハウアーが全体的自然観の思想家として、ゲーテが語らなかった思想的部分を補い、この自然観を自身の哲学的体形に組み入れることに成功したという解釈も可能になる。全体的自然を介して、ショーペンハウアーとゲーテのつながりが生まれた。そのつながりの中で哲学者は詩人からの称賛と祝福を願ったが――それは虚しく終わることとなる[18]。けれども、彼の願いは別の形でかなえられたのではないだろうか。彼の全体的自然観の展開は、父親像に対する哲学的超克の物語としても読み解くこともできるからである。ゲーテが沈黙した先に、ショーペンハウアーは立ち、全体的自然における主客の在り方を描いてみせるのである。

18 Safranski, S. 284-286.